

つながり・むすびつき・関係性のことを「縁」といいます。「あなたと出会ったのも何かの縁だ」とか「縁がなかった」等と日常生活上でもよく使用する言葉ですが、因果関係がはっきりとわからない結びつき、というニュアンスで使われることが多いのではないのでしょうか。

この見えないつながり、結びつきは、意識されてはじめて現実のものとなります。意識されなければ無いものと同然でしょう。倫理研究所創設者の丸山敏雄は、この世のあらゆる物事はそれぞれ分離しているのではなく、目に見えない次元でひとつながりにむすばれており、自身の心の持ちようが他に影響を及ぼすと述べました。

親子・夫婦・兄弟・交友・その他の間には無形の紐帯にむすび合わされて社会がつくられているように、心の関係においても十重二十重に、ちょうど電線を引きまわしたように——いや無電の発信機と受信機のように、打てば響くの関係にあつて、これは、動植物・機械・器物・その他一切の物は、対象に及ぶ。これは空中にある電気の作用を想像すれば、大凡の関係が想像出来る。これを「えにし」(縁)と言う。

〔実践倫理学大系〕

五十代女性のFさんは娘と二人で暮らしています。娘が生まれた直後に、夫がギャンブルに生活資金を使い込み始めたことから離婚に至り、その後、Fさんは仕事に育児に女手一つで娘を育ててきました。

娘が中学生になった頃、不登校となり、



## 見えないつながりは意識して「縁」となる

家に引きこもるようになりました。あらゆる手を尽くしても改善せず、Fさんは仕事にも行くことができず、困っていました。

ある日、Fさんは知人から倫理法人会を紹介され入会、その後倫理指導を勧められ受けることにしました。

一通り話を聞いた講師がFさんに伝えたのは「別れた夫の幸せを祈る」という実践でした。家庭を省みず、好き勝手に生きていた元夫をFさんは恨み続けていたのです。娘の引きこもりが改善されるのであればと、Fさんは元夫が住んでいるであろう方角に向かって、相手の幸せを祈る実践を朝晩始めました。すると一週間ほど経過した頃、娘から「お父さんってどんな人だったの？」と聞いてきたのです。これまで一度も父親のことを聞いてこなかっただけにFさんは大変驚きましたが、離婚に至った経緯を包み隠さず話した上で、元夫の長所や人柄等も伝えました。

父親のことを初めて聞いた娘はとても喜び、その後は本来の明るさを取り戻し、自ら学校にも行くようになったといいます。

Fさんが元夫の幸せを祈る実践を始めたタイミングで、娘が父親のことを聞いてきたのは、単なる偶然ではないでしょう。見えないつながりを意識したことによって、見える形になって現われ始めた事象といえるでしょう。

人と自分は別々の存在と考えずに、見えないつながり、縁を大切にして日々の生活を充実させていきたいものです。